

第26回 日比谷 夜能

26th HIBIYA CITY YA-NOH

十月二十三日(火)

狂言 口真似

能(宝生流) 石橋 連獅子

野村 万作

田宝田 野村
崎生崎 万隆
甫和隆 三英

十月二十四日(水)

狂言 魚説法

能(観世流) 松風 見留

野村万之介

梅若六郎
梅若靖記



主催 産経新聞社
 特別協賛 三菱地所株式会社
 協賛 財団法人JFE21世紀財団 明治安田生命保険相互会社
 協力 三菱地所ビルマネジメント株式会社 財団法人梅若会
 監修 梅若六郎
 平成19年10月23日(火)、24日(水)
 午後6時開場 6時30分開演
 日比谷シティ広場(東京都千代田区幸町2-2-13)
 ※雨天の場合は中止、チケットは払戻し。
 料金 前売り指定席券 5000円/自由席券 4500円(税込)
 当日指定席券 5500円/自由席券 5000円(税込)
 前売券発売所 サンライズプロモーション東京 057010013337
 チケットぴあ <http://pia.jp/>
 e+イープラス <http://eplus.jp>
 ※お問い合わせ 産経新聞社事務局 03-3275-8903(平日10時~17時)
 ※サンライズプロモーション東京 057010013337
 ※公演に関しては、当日のみ0180-9913088にてご案内いたします。
 ※なお、都合により出演者などの変更がある場合には、ご了承下さい。
 ※会場は屋外のため、寒さが予想されます。
 ※防寒のためのコートなどをご用意ください。

狂言「口真似」くちまね

主人はよい酒と肴をもらったので、誰か酒の相手になる人を探すよう太郎冠者に命じる。太郎冠者は顔見知りを訪ね、無理やり主人宅まで案内をする。客が酒乱で有名な人物と知った主人は、いい加減にあしらって帰そうと一策を案じ、自分の言うとおりにするよう太郎冠者に言い含めて客を迎える。ところが太郎冠者は勘違いし、主人の一挙手一投足を真似するばかり。怒った主人が太郎冠者を打ちつけると・・・。

単純な構成ながら、狂言の面白さを味わうことができる小品です。

能(宝生流)「石橋」しやつきょう

ここは中国の清涼山(しょうりょうせん)です。谷と谷との間にかかっている石の橋は石橋といつて現世と浄土をつなぐいわれのある名所です。ここに日本から渡つて来た僧・寂昭法師がたどり着き、しばらく休んでから橋を渡ろうと思つています。すると何処からともなく童子が通りかかり、橋の由来を教え、みだりに渡つてはならないと諭し、しばらく奇特を持つように言い残して去つてしまいます。寂昭法師が橋の向うを見ていると、二匹の獅子が現れ、雄壮な獅子舞をみせます。

狂言「魚説法」うおせっぽう

施主が堂を建立し、その堂供養を住持に頼もうと寺を訪ねるが、住持は留守で新発意(しんぱち・出家して間もない修行中の僧)が留守番をいたので、施主は新発意に説法を頼むことにする。新発意は説法を説いたことはないがお布施は欲しい。子供の頃から浜辺に住んでいた新発意は、魚の名前を並べて説法を始める。始めはおとなしく聞いていた施主だったが、やがて・・・。

能(観世流)「松風」まつかぜ

西国に下る旅僧(ワキ)が須磨の浦で一本の松について浦人(アイ)から海女の松風・村雨の旧跡だと教わる。僧は松に念仏供養をした後、近くの塩屋を訪ね二人の海女(シテ・ツレ)に宿を求め、僧が在原行平の話をすると二人の海人は涙をおさえ自分達が松風・村雨の亡霊だと打ち明ける。二人は行平が須磨に三年間の配流の間に寵愛を受けやがて行平は都に帰り亡くなつたが、自分達も死んだ今でさえ行平の形見を手に取ると涙がこぼれ、松の立木さえ行平の姿に見えると語る。二人に申いを頼まれた僧は夜明けの浜に吹く松風に夢から醒める。

十月二十三日(火)
狂言 口真似

太郎冠者 野村万作
主 月崎晴夫
何某 石田幸雄

能(宝生流) 石橋 連獅子

白獅子 田崎隆三
赤獅子 宝生和英
童子 田崎甫

寂昭法師 高井松男
笛 藤田次郎

小鼓 鶴澤洋太郎
大鼓 亀井広忠
太鼓 桜井均
地頭 三川淳雄

十月二十四日(水)
狂言 魚説法

新発意 野村万之介
施主 高野和憲

能(観世流) 松風 見留

松風ノ霊 梅若六郎
村雨ノ霊 梅若靖記

旅僧 宝生閑
須磨ノ浦人 高野和憲

笛 藤田次郎
小鼓 曾和正博
大鼓 亀井広忠
地頭 土田晏士

日比谷シティ・ホームページ=http://www.hibiyacity.com

